

キリスト教文学としての「氷点」

縄 田 浩 介

一、まえがき

「氷点」の連載が終わった直後、江藤淳が、朝日新聞の「文芸時評」でこの作品をとり上げ「成功した懸賞小説以上のものだとも思わない。しかし、過去一年間久しぶりで文壇小説を多読してみても」「この作品にひとつの挑戦を感じた」と言っている。それを裏書きするかのようには、作品の売れゆきも、作者も方々から引つ張りだこの、所謂「氷点」ブームを捲き起こしてしまつた。さて、江藤淳の「挑戦を感じた」というのは、換言すれば、従前の多くの作品が持ち得なかつた特異な何か、この「氷点」においては認められるということにほかならないのだと思われる。

全く文学歴は零に等しい、北海道の街に住む一主婦に過ぎなかつた、無名の作者による処女作品^{注3}が、突如として、所謂「氷点」ブームをまで捲き起こしたことにについては、それ相応の多くの理由が予想されるのは勿論であるが、重要な意味をもつてとり上げられなければならないのは、一に、この作品のもつ特異な文学性の「あるもの」とか、ないしは、この作品のもつ姿勢の問題があるのであつて、それらはとりもなおさず「キリスト教文学」としての性格であると考えられるのである。これらのものが、どういふふうに取り上げられ、どう描かれているかを追究して、「氷点」の意義を捉える一端にしたいと思ふ。

二、「氷点」の文学性を形成する三つの要素

さて、この「氷点」は「一面からいえば戦前の婦人雑誌連載小説によくあつた家庭小説の型を踏襲」（江藤淳）したもので「成功した懸賞小説以上のものだとも思わ」（空前）れない。文体や技法的には稚さが目に立つのは、その文学経歴からも、また特に始めて手がけた長編ということもあつて当然のことかと思われ。また、平野謙の指摘する「出生届」の不自然さや出生の秘密の明かし方など、目に立つ不自然な構成など種々の欠点も認められないわけではない。だが、それにも拘わらず読者を魅了し、惹きつけ、熱狂的に読まれているという。その魅力が、現文壇への「挑戦」であり、この作品のもつ大衆性にほかならないのではあるまいか。それでは、そういう新しい魅力なり、大衆性なりは、何によつて招来されたものであろうかということになるのであるが、それは、端的に言うならば、「氷点」が、キリスト教文学としての条件を完うしているからということができようかと思ふのである。しかも、明治以来、キリスト教文学と称せられ、あるいはキリスト者作家と称せられた人たちによる作品でありながら、真実にキリストとの出会いにおいて問題を解決した真実のキリスト教文学と認められる作品が、極く新しい限られた数人の作家にのみ辛うじて指摘できるのではないかと思われるような状況の中にあつてはなおさらのことである。

注1、朝日新聞「文芸時評」、江藤淳、昭和四十年十一月二十六日夕刊。

2、ただ、「氷点」の読者やこれを採り上げている側（テレビ・映画・演劇等々）の受けとり方や理解の点では必ずしも一致したものがあるとは思われないし、中には誤解に基づく商品価値形成の向きもなくはないようである。こういう向きの事態には、いまは無関係に意義追究をする。

3、作者には、昭和三十七年に「主婦の友」の手記募集で「太陽は再び没せず」（筆名、林田律子）の入選作がある。が、純粹の意味での小説としては、「氷点」が処女作品である。

* なお、引用文の一部に付した傍点はすべて筆者による。以下同じ。

そのキリスト教文学としての条件というのは、この「氷点」に関する場合、第一に、作者の問題があり、第二には、作者の姿勢の問題があると考えられる。そして、第三には、この作品の主題に何が考えられているか、があると考えられる。

第一の作者については、「氷点」の作者である三浦綾子の生活の基盤^{注7}には、キリスト信仰にその根源があると言わなければならないであろう。作者には、作家としての経歴は無くとも、キリスト者としての生活は確固として打ち樹てられており、キリスト者としての歩みが絶えず続けられていたということである。それが、作者の文学活動においても変りなくその基盤となり、作者自らの言葉^{注8}を俟つまでもなく、その活動の主たる支えになつてきている筈である。すなわち、近代文学の歴史的に未解決に等しい問題を小説「氷点」の作者も「キリストとの出会い」

において解決した一人であるということになる。事実、この「氷点」は、作者自ら述べているように「ただクリスチャンとしての信仰生活の中で書いた」(対談)ものであって、作者は旭川六条教会に所属する熱心なクリスト者であると聞く。常に聖書を繙き、クリスト者評論家佐古純一郎の著述を学び、「そして祈って書いたことが他の作品とは異った要素だったと思」(対談)うと語っているのである。このようなところに、「氷点」がクリスト教文学として立ち得ている第一の条件が認められるのではなからうか。ここから作者の、作品制作の姿勢も主題も力強く固く生かされて来ていることを知るのである。従前の作家たちに認められなかった、「氷点」の作者の、特異な「人間観や生活感覚の新鮮さ」(江藤淳)も「おそらく長い年月をかけて自分の生活の中からこういう人間観を得たのであるう」(江藤淳)と見るのも全く当を得ていると言わなければならないであろう。

第二には、この作品の制作に当たっての姿勢の問題である。すなわち、作者に特に意識されたと思われる一面に、**大衆性の具備**ということが認められる。このことは作者自ら語っているように「とくに意識したというのは小説の対象が**大衆である**ということ」(対談)あつて、同時に作者が「書きたかったのは、**スーパーマンのような個性の強い人ではなくて、ごく一般のありふれた人間**」(対談)であつたということである。これは確かに登場人物が最も読者大衆の生活の中に在るわけで、対象を読者の在るのと同じ地盤におくことが、どんなに読者の共感や連帯感と呼び起こしたり、読者を魅了しつつ読ませることになるか、その効果を十分ねらっているところと言えるであろう。だが、作者の姿勢に見える「対象が大衆である」というねらいは、単に作品の人気を博そうと気にしたのではなく、自分の作品の発売部数だけにかかわって読者の共感を求めようとしたのではなく、これは作者の生きる世界における**使命感**から来ていると見なければならぬ。作者はあたかもパウロのことばのとおり、いつでも彼女の生活の中でできる限り福音を宣べ伝えなければならぬと考えているようである。だから作者は「このようにかたくなな私が信仰をもてたのだから、私が他の人に福音をつたえられないわけがないと思う」(対談)道理である。そして作者は、日常生活における場合と同様に、その作品においてもクリストを宣べ伝えようとしたのである。それあればこそ作者は祈りながら、「訴えずにはいられないモチーフをもつて」(対談)書かないではおられなかったであろう。その辺の事情を自ら『私を信仰に導いてくれた西村久蔵先生の生活そのものが「クリスチャンとは伝道するも

のなり」ということを強く教えてくれました。受洗したとき三人の友の名をあげて、この人たちが救われたらいつ召されてもいいというような気もちをあたえられました」(対談)と言っている。また、「主婦の友」に書いた手記の反響で「大衆誌というものは伝道のために大切だと思」い「文学をする人はよく信仰にとらわれないで書け、というようなことを」言うが「私は自分をクリストの宣伝屋だと思いたい」「ひとりでも多くの人にイエスさまのことをつたえればそれでいい」「だから、朝日新聞に応募したときも、これを出せば少なくともひとりの審査員はよんでくれる。その人に伝道の機会が与えられると思つた」(対談)と言っている。このように見てくると、作者三浦綾子は徹頭徹尾自己のクリスト者としての生活完成と福音宣教のわざの一致に、生きる望みを托しているように思われる。彼女の「氷点」およびその後の作家活動もそこに意義を認めなければならぬように推測せられるのである。彼女が福音を宣べ伝えるというのは、パウロと等しく「そうせずにはおれないから」であつて、全くの奉仕的使命感に尽きるものといふことができよう。作者三浦綾子はこのパウロのことばのままに生きようとしているのかと思われる。作品入賞で自らのスポイルされることを恐れては予め忠告を親しい人たちに願ひ、所属教会の牧師は、作者がそういうことで生活の基本的な姿勢を変える人ではないと証言しており、賞金の使途は全く敬虔に愛に充ち、彼女の綺麗な現実の態度が伝えられている。

作者のこうした考え方や姿勢から生れた「氷点」に含められた意味は極めて深く重大なものがあることを思わせられる。このような態度と立場で書かれた作品は、また当然、江藤淳や山本健吉らに指摘されているように「自己中心でない視点」をそなえており、俗流の作品が単純に一片の罪の意識すらなく「被害者の怨恨を動機とする社会の裏面の暴露」(江藤淳)といった類の歪んだ罪の現実の描き放しの中にあつて「ひがみを否定する視点を提供しているのも」(江藤淳)当然のことながら「氷点」のもつ大切な意味を見逃せない。

かくて、第一、第二にとり上げた二つの問題も、「氷点」における重要な文学性の問題としては、作者のクリスト教信仰に基づく一点に集約されるものであつて、本稿での追究もその上に立つての問題解明というところに限られてくるわけである。従つて、第三の主題の問題も、この立場でおのずから追究解明されなければならないと考えられる。

注4、毎日新聞、昭和41年5月2日、平野謙「四月の小説」上。

5、「氷点」の魅了の例。

10、わたしが福音を宣べ伝えても、それは誇にはならない。なぜなら、わたしは、そうせずにはおれないからである。もし福音を宣べ伝えたいなら私はわざわいである。進んでそれをすれば、報酬を受けるであろう。しかし、進んでしなくても、それは、私にゆだねられた務なのである。……私は、すべての人に對して自由であるが、できるだけ多くの人を得るために、自ら進んですべての人の奴隸になった。(コリント人への第一の手紙、九、16・17・19)

三、「原罪」と「救済」

1、陽子の場合

〔主題の追究〕 本項では「氷点」の特異な文学性を形成する三つの要素のうち最も総合的で、最も直接的に「氷点」の評価にかかわる重要な、従って、本論文でも中心命題となっていると考えられる第三の問題「主題に何が考えられているか」について追究しなければならない。

それについて、佐古純一郎が興味深い提言をしている。それは「朝日新聞の小説の伝統」(対談)が漱石によって始まり、山本有三・井上靖・石川達三と引き継がれ、所謂「漱石山脈」(対談)を形成し、そこに新しく爆発形成された「昭和南山」(対談)「氷点」が連なっていると見て、「漱石が最後まで追求したテーマは人間のエゴのからむ悲喜劇」(対談)であり、「漱石山脈」の根基となっていることを指摘している。エゴイズムがしよせん脱れることの出来ない人間性であり、しかも誰もが等しく持ち等しく反省と苦悩の因として持てあまし、脱れることが出来ない弱さにもがいている人間、そのような対象が常に悲劇の因をなしている。そういう伝統の上に新しく位置を占めた「氷点」というところである。「氷点」は同じ「その根本テーマを追っているように」(対談)思われると言っている。しかし「氷点」の場合、そこに新しい「爆発」を思わせる何かがある。「現代人に大切な問題をふだんから考えて」(対談)いて、といわれ「長い年月をかけて、自分の生活の中から」(江藤淳)えた「人生観」といわれている「あるもの」が、実は極めて重大にこの作品の主題を決定し、従ってこの作品の価値もそれによって決定づけられているということができる筈である。

それは前項で見て来たように、いわば「氷点」制作の背景というよりも主体者としての作者のキリスト信仰とそこに根ざす制作態度によって、この作品に結集

して表現されているものを押し出してみると、おおよそどのような形で何が作中に凝集されているのか、そしてそこからうかがわれる作者の意図したテーマと効果何であるかを捕捉できる筈である。

〔「氷点」の意味〕 まず作者の意図を最も集約して表現していると思われることばは「氷点」という標題であろうかと思われる。作者は作中に僅か一ヶ所二回ほど、このことばを用いている。すなわち、出生の秘密を知らされたことから凶らずも生まれながらにして自らにまつわりついている罪を知ったショックで死を決意した陽子が父母へ宛てた遺書の中に、この「氷点」ということばは見えているのである。陽子は自分が辻口啓造と夏枝との実子でないことを早くからうすうす知りながらも、一見純粹無垢に「健気に明るく生きて」来ていた。しかし、最後に啓造と夏枝の実子ルリ子を殺害した犯人佐石土雄の子であるという自分の出生の秘密を夏枝からあばかれるにいたって「一途に精いっぱい生きてきた陽子の心にも、氷点があつたのだということ」を知って陽子は自殺を企てる。遺書では続けて『私の心は凍えてしまいました。陽子の氷点は、「お前は罪人の子だ」というところにあつたのです』(403)と言っている。全く罪の意識をもたなかった陽子であつたが、「自分は決して悪くはないのだ。自分は正しいのだ、無垢なのだ」という思いを支えられて(403)辛いことにも耐えることができたという意識を強くもつただけに、それが陽子の「異邦人の律法」となって罪の意識をもつことができ、同時に「自分は正しい」という傲慢さがひと度崩れるとその苦悩も激しかったのである。これは、作者は「氷点」とは「原罪」のことであると明らかに言い表わしていると言つてよいのではなからうか。

〔原罪の自覚〕 「殺人者の娘であると知つた今、私のよつて立つ所を失いました」(403)という陽子の告白は、先にも触れたように、彼女が非常に正しく無垢に生きて来たと思われ、また自らそう思い込んでいる一面が強かつただけに罪の自覚によつて絶望の極に陥つた姿をまざまざと示している。

陽子は、洞爺丸遭難の部分に出て来る外人宣教師を除いては、この「氷点」の他のすべての登場人物と同様に、キリストを知らない「異邦人」でしかなかっただけに、パウロのことばが極めて重大な意義をもつて陽子の罪の自覚の意味を説き明かしていると思わなければならない。

悪を行うすべての人には、エダヤ人をはじめギリシヤ人にも、患難と苦悩とが与えられ、善を行うすべての人には、エダヤ人をはじめギリシヤ人にも、光榮とほまれと平安とが与えられる。なぜなら、神には、かたより見るこがな

いからである。そのわけは、律法なしに罪を犯した者は、また律法なしに滅び、律法のもとで罪を犯した者は、律法によってさばかれる。なぜなら、律法を聞く者が、神の前に義なるものではなく、律法を行う者が、義とされるからである。すなわち、律法を持たない異邦人が、自然のままに、律法の命じる事を行うなら、たとえ律法を持たなくても、彼らにとっては自分自身が律法なのである。」(ローマ人への手紙、二、9-14)

とあるとおりで、陽子の場合も律法を持たない異邦人として、元來罪の現実にあるながらそれを罪として意識することすらできなかった。しかし「出生の秘密」を知らされたという契機によって陽子は自らの律法(それは良心としてもよい)によって罪の自覚をもつに至った。人間は自ら善しとしているところであれ、眞の律法として与えられているところであれ、パウロの言うように律法に忠実であろうとすればするほど実行を全うできないことを知るだけである。すなわち、ひとたび律法をいだけば、罪の自覚に苦悩は深まるばかりである。罪の自覚を持てば罪からの解放なしには生きる方途が立たない筈である。北原への遺書の中ではすでに「今はもう、私が誰の娘であるかということは問題ではありません。たとえ、殺人犯の娘でないとしても、父方の親、またその親、母方の親、そのまた親とたぐっていけば、悪いことをした人が一人や二人必ずいることでしょう」(404)と未熟な認識ではあっても「原罪」の自覚へ進んでいるといえよう。

そういう陽子について、なお次のような描写を見逃してはならない。それは、辻口病院の入院患者で翌日には退院予定の患者が自殺したことに絡んで書かれている。彼、正木次郎は空洞もない軽い肺結核だった二十八才の銀行員である。すでに「復職も決定していた。父母は健在。兄と弟の三人きょうだいで、父は小学校の校長である。何の問題もない環境であった。」(397)しかし、この自殺者正木次郎はその一週間前、辻口院長に呼ばれて「何のために生きているのかわからなくなりました」(323)と告白し「病気の間は治すという目的がありました。しかし治ったら一体何をしたらいいんですか」と「絶望的なまなざしを」(323)していたという。そして遺書には「結局人間は死ぬものなのだ。正木次郎をどうしても必要だといってくる世界はどこにもないのに、うろろう生きていくのは恥辱だ」(324)と書いている。その話を聞いて陽子は「結局は、その人もかけがえのない存在になりたかったのだわ。もし、その人をだれかが真剣に愛してしてくれたなら、その人は死んだらうか」(324)と思ひ、父の啓造に『「だれかが心から、陽子はかけがえのない存在だよといってくるなら……」』と言った言葉に、啓造は、愛に飢

えている陽子の孤独を感じた(325)のである。それは、「人の悪意をも、善意にうけとるふしぎなものが、生まれつき備わっているよう」(415)な「天性、恐怖とか悪意というものを持たずに生まれてきたように見え」(428)、「自分を不幸だと思つたことは一度もない」(299)幸福そのもののような陽子の上にも、外見には全く問題など一かけらも見えない辻口の家にあつて、案外な苦しみや不幸が覆いかぶさっていることを示している。人間の力では「律し切れない、もつと根本的な罪」(「氷点」を書き終えて)すなわち「原罪」が、その現実としてあるということを作者は伏線として設定しているようである。

また、陽子の自殺をはかった後の枕頭に集まった人たちの会話の中にも、作者は高木と啓造とに次のように言わせている。「陽子ちゃんは、だれの子に生まれても、いつかは、こういうことになつたんじゃないのかな」(414)また「罪についてこんないきびしく意識する人間は、だれの子に生まれても、結局同じ考え方をしようになるだろうな」(414)とも言い、北原が夏枝のあばきさえなければと言つたのに対しても「だが、いつかは同じ罪意識を持つような人間だよ、陽子ちゃん(414)」と言う高木。それに対して啓造が心中に「そうかも知れない。おれは犯した罪のことを問題にしているが、陽子は、罪の根本について悩んだのだ。姦通によって生まれたということを知つても、苦しむだろうし、何の問題もなく育つても、同じように苦しむ人間なのかも知れない」(414)と、これもすでに原罪を自分で自覚した啓造をして、陽子の原罪の自覚を同感させているのである。少なくとも陽子自身は自らを生れながらにして「罪ある者であるという事実」(404)において握むことができていた。

しかし、キリストとの出会いをもたない陽子はそのままの段階では一介の異邦人に過ぎない。「自分は正しい」という傲慢さの上に認めた罪の自覚は自らを苛む枷以外の何ものでもなかつた筈である。『しよせん、異邦人らは、信仰による義によらずしては「生きる」道はないのである。』(略解・ローマ一、26-22解説)しかも陽子は北原への遺書の中で、罪の負目の苦しさに堪えられないことを表白している。母夏枝のあばきによって「私の中に眠っていたものが、忽然と目をさしました。それは今まで、一度も思つても見なかつた、自分の罪の深さです。一度めぎめたこの思いは、猛然と私自身に打ちかかつて来るのです」(404)と言つて「容赦なく……責めたる」罪に考える余裕さえもなく打ちひしがれているのである。勿論、信仰による救済への道を捉えることができるほどの素地も考える運もあるわけもなく、絶望のままカストロフに入ろうとするのである。

〔救済の暗示〕 しかし、作者は陽子を通じて読者に、罪の自覚に悩むということとともに、その悩みに絶望して自殺に踏み込んだ陽子を罪の枷から自由へ解放する「救済」への願いというものを、ほのぼのとした暗示として提供することを忘れないでいるように思われる。これは、作者の願いのままに、罪のゆるしが人力の及びえない絶対の力を思わせながら、陽子の蘇生へのきざしとともに、読者に希望とある安堵の喜びを残すものと言いうことができるであろう。

このように、作者は陽子を通しての罪の現実を表現しているのである。しかも陽子はキリストを知らない。モーセの律法も持たない。ただ自己の良心によって罪の自覚を得た。それだけに早急には救済に入り難い条件の下にあるわけである。しかし、近代文学の殆んどものが罪の現実を描きながらただそこで終ってしまっているのにひきくらべて、「氷点」では原罪の自覚を描き得たところに救済の困難を思いつつも、また如何に遠く隔たつていても、しかも救済につながるものをもっていたということができよう。多くの読者から陽子^{注12}を死なせてはならないという願いが作者に寄せられたというのも関わりのある事実と言うことはできまいだろうか。勿論、明確なキリストによる救いを認識した読者があつたかどうかなどということは全く別のこととしても、作者のほのめかした救済への暗示が多く読者に与えている何ものかを思わないわけにはゆくまい。少なくとも単純素朴な意味で「小説の中でも人間の幸福をねがっている」(「氷点」を書き終えて)のであろうし「小説の中においても幸福な結末を共感し確認したい人間の心を」(全前)呼び覚ましていただけの部分に限つても、作者が「原罪」を主題にとり上げた意義はあつたといふことができるのではなからうか。

このような言い方は、「原罪の自覚から救済へ」という主題のように受けとられそうであるが、一応は「原罪」をテーマとして見ると限つて見るべきであつて「救済」の問題にまで具体的に触れようとはしてはいないと思われる。しかし「救済」を無視しようとしてはいない。すなわち、「原罪を提起した以上、作者はその答えである救いを持つてははずである。しかし、あなたの小説によつてそれをつかみ得なかつた人に対する責任はどうするのか」(「氷点」を書き終えて)という問いに対して、作者は「そこまで、責任を問われてはかきません」「小説の限界と言つては不親切であるが、解答はひとりひとりの問題として追究していただくしかないと思う。もし小説の中にそこまで入れると、小説でなくて説教になるかもしれない」と言いながら「私の訴えを感じとつていただ

て、新しい出発点に立つたら、自ら道はひらけるはずである。その道は神への道であるから」(全前)とも言つている。彼女の作品はそのとおりに描かれていると言つてよい。そして「このことを聖書は証明し、教会は説き示す。ひたすらに聖書を読んで、道を求めていただきたいと私はねがう。」(全前)と言つて「キリストイエスは、罪人を救うためにこの世にきて下さつた」(テモテへの第一の手紙、一、15)という聖句を挙げてゐる。これで作者の意図目的は明らかであるが、では作品「氷点」にどのような形で作者の言うような点への手がかりが認められるであろうか。これはキリスト教文学としてはその本質にかかわる重大な意味がかかつていふと言わなければならぬ。

こういう作者の意図は、北原からの何気ない手紙でもすでに示されている。斜里の海岸で出会った女の入水事件について「死のうとしても死ねない時がある」ということが、ぼくには意味深いものと思われてなりません。それこそ文字通り死にもぐるいの人間の意志も、何ものかの意志によつてはばまれてしまつたというこの事実には、ぼくは厳粛なものを感じました。」(314)と書き送つてゐる。しかもこの手紙によつて陽子の思念の中に浮んだ次のことは、作者の意図が割合に明瞭に示されていふと見てよいのではなからうか。

『大いなるものの意志とは何のことかしら？神のことかしら』若い陽子には神という言葉が漠然としていた。神について考えたことはなかつた。神を信じなければならぬほど弱くはないと、陽子は思つていた。しかし、北原の手紙を読むと、「大いなるものの意志」という言葉に共感した。他人の書いたものならば読みすごしたかも知れない言葉だつた。(私がこの家にもらわれてきたのも、大いなるものの意志であろうか) (314)

これは「人間の意志をこえた、もつと大きな意志があるような気がする」(315)と「人間の意志」に勝る絶対の力をもつ「何ものかの意志」「大いなるものの意志」を考えている。しかも「大いなるものの意志」を不分明ながら「神のことかしら」と提言した作者の意図は汲んでおかなければならぬ。

また、先に引いたところであるが、辻口病院の入院患者正木次郎の自殺からまる啓造と陽子の会話の中にも見過せない問題を含んでいるように思われる。陽子は正木の気持がわかると言つて「私も自分がこの世でかけがえのない存在だといふことが、よくわからないの。本当はどんな人間だつてみんな一人一人かけがえのない存在であるはずなのに、実感としてはよくわからないの。だから心がから陽子はかけがえのない存在だといつてくれたらわかるかも知れないけれど

……。正木さんって方も、だれかに強く愛されていたら、死ななかつたと思うの」(325)と語っている。「陽子は生まれてはじめて、人の前で愛という言葉を使ったので」「自分の言葉にパツとほおをあからめた」(325)くらいで、陽子自身には「愛」の意味や「死な」ずにすむ意味が真実にわかつていたとは思われない。「自分がこの世でかけがえのない存在だということがよくわからない」ということは「神の愛」を知らないからである。それにも拘らず「だれかが真剣に愛していてくれたなら」と考えて啓造に訴えたのは、陽子自身の自覚の有無に拘らず、作者はここにも「救済」の意味を暗示していると受けとられるのである。

全く同じ姿が描かれているのは「嵐が丘」を読んで主人公のヒースクリップへ同感する陽子である。「親に捨てられた子は、ヒースクリップのように両手をさしのべていつまでもいつまでも自分の愛するものを、ただひとつのもの、かけがえのないものとして追い求めずにはいられないんだわ。自分が親にとつてさえ、かけがえのない者ではなかつたという絶望が、こんなに激しく愛する者に執着するんだわ」(297)と思い「自分もまた、激しく人を愛したいと思っていた。そして愛されたいと思っていた」(297)「愛に飢えている陽子の孤独」(325)が切実に魂の乾きをいやす依り所を求めていたわけである。

いま一つ陽子の遺書を探ってみよう。その中で「罪ある自分であるという事実」に耐えて生きて行く時にこそ、ほんとうの生き方がわかるのだという気も致します」(403)と言っている。勿論陽子の自覚は極めて曖昧模糊としたものであるが「罪ある自分であるという事実」何によって「耐えて生きて行く」のかということになると「私にはそれができません……もう生きる力がなくなりました。凍えてしまったのです」(403)という陽子の不知を超えて、読者には作者の暗示図が受容されるのではなからうか。罪の事実を耐えてゆくということは、おそらく罪意識の消滅だけを願ったことではない筈である。罪の事実の解消というところが陽子の心には痛いほどにあつたにちがいない。だからこそ陽子にとっては依り所のない厚い壁が立ち塞がったのであり、絶望のほかなくなつてしまつたわけである。そこに、救済を暗示する思念への段階に読者を導く手立が施されていると見られるわけである。そこで、ほんとうの生き方、罪の綱目をとかれた自由すなわち新しい生命への望みが見えてくるわけである。

また同じ遺書の中に『おとうさん、おかあさん、どうかルリ子姉さんを殺した父をおゆるし下さい。今、こう書いた瞬間、「ゆるし」という言葉にハツとするような思いでした。私は今まで、こんなに人にゆるしてほしいと思つたことはあ

りませんでした。けれども、今、「ゆるし」がほしいのです。おとうさんに、おかあさんに、世界のすべての人々に。私の血の中を流れる罪を、ハッキリと「ゆるす」と言ってくれる権威あるものがほしいのです。』(403・404)と記している。

ここでは作者の意図はかなり明瞭になつてきている。どこに何が救いとしてあるのか握めずにいる盲目的陽子ではあつても「罪のゆるし」を行なう「権威あるもの」を強く希求している。その「権威あるもの」が、すでに暗示の域を超えて読者には指し示されたと思われるほどの描き方である。作者はここで明らかに陽子の罪の自覚に対して、その罪に耐えて生きてゆける希みを遙かな将来に向つてほめかしていると言えるのではなからうか。それは自殺という絶対とも思われる暗い絶望の彼方にさす微光の如くにはあるが、しかも陽子自身は、いまは全く不関知のまま「もはや深く考える余裕もなく死に向か」(「氷点」を書き終えて)つてしまふのであるが、「権威あるもの」によって「ゆるされる」という具体的な力が十分に訴えとなつて読者には感じとられるところであつて、読者をして「新しい出発点に立」(全前)たせ、「自らの道」それは「神への道」としてひらけるにちがいないと知らされるべき重大な意味を孕んでいると思われる。

注11、啓造だけは「信者ではないが……英語をならいに学生時代二年ほど教会に入りましたこと」がある程度の教会歴(?)をもっている。(76)

12、「氷点」の反響の一部。刑務所を出た青年の手紙に「もつと早く読んでいたら悪いことをしなかつたのに」といつてきたのがある。また「たくさんの手紙の中で上向きの手紙がほとんど」など。作者の談話である。佐古純一郎の話では「ある牧師さんは私に、陽子がどうなるのかわからない間は仕事が手につかない、佐古さん、私は陽子のために祈っているのですよ、といっていました」と。(ともに「対談」)

2、啓造と夏枝の場合

〔「氷点」の不幸と原罪〕

さて、啓造と夏枝の場合、というよりこの場合は江口一家を中心にした「氷点」生活圏にある人たちが全体を併せて、人間の罪と不幸の問題がどう問われているのであろうか。少なくとも、啓造と夏枝夫婦による罪の姿とその結末はこの作品の最も重要な対象になつていてと考えられる。啓造は旭川市内に病院をもち、郊外の神楽町に「美しいいちいんの垣をめぐらして低い門を構え、赤いトタン屋根の二階建の洋館と青いトタン屋根の平家からなるガッ

シリした」(13)自宅に美しい妻夏枝と長男徹、長女ルリ子たちと、何一つ不足なく、この上なく平和な、人も羨む生活を続けていた。しかし、こうした平和な明るい筈の家の中にも目に見えない冷い風が忍び込み吹き荒れ、果ては荒涼とした荒野のような不幸が襲って来た。物語はこういうところから始まるのであるが、このような人間の世界の中に「人間を根本的に不幸ならしめている何かを感じられはしないだろうか」(「氷点」を書き終えて)と作者は言っている。この辻口というよそ見には至極平和で明るい家庭の中にも、最も普遍的人間としての葛藤する心と行為における罪がみんなを傷つけ、時に自ら義しきを求めながらそれが罪の意識からの逃避に過ぎなかつたりして相変らず不幸に陥まれ、罪の意識からの脱出もできないでいるという苦悩する姿を繰りかえしている。このように、「氷点」では、深まる罪の姿が種々の形姿をもって繰りひろげられてゆく。それが最後に陽子の自殺を契機にして、「お互いに思いがけないほど深く、かかわり合い、傷つけ合っている」(413)もの(作者はこれを「原罪」だとしている)、それは例えば、洞爺丸遭難の折自らの救命具を人に与えて死んでいった宣教師が見つめて生きてきたものとはちがつたものを見つめて生きてきたと、自己の中にある人間の原罪を真に自覚するに至るとともに、罪の現実からどう自由になることができるかということについても思い至ることを作者は読者に対して提示しているのかと思われる。このような「氷点」の流れの中に啓造と夏枝を中心に掘り出されるべき主題はまた展開されているものと思われる。そこでまず罪の姿を形成表白しているものとして、疑い、憎しみ、悪だくみ、孤独、偽善、罪意識からの逃避などの姿をたどって見たい。そしてその後に来る罪の自覚と作者の暗示しようとする罪からの解放について探究し、本項での命題たる主題を決定することにした。

〔疑い〕 辻口家を中心にした不幸、ないしは罪の姿は、ふとした夏枝と村井医師との不倫に対する啓造の疑いから展開を始めている。「氷点」における苦悩と不幸がこの啓造の疑いを基点として展開し、登場する一人々々を絡めつけている姿が終始大きく読みとられる筈である。特に、夏枝に向けられた憎しみが復讐的な惨忍な悪だくみとして、ルリ子殺害犯人佐石土雄の遺児をそれと知らせないで引きとって夏枝に育てさせたのも、この疑いが直接原因になっている。夏枝が陽子を憎むようになるのも従って付随的に起つて来るのであって、そのあくどい仕打にも漸く疑いを懐かざるを得なくなつた陽子の悲しみも、遂に自殺という極度の不幸へ駆りたてられてしまつているのである。このように疑いの侵入した

生活の中には真実の人間関係は成り立たない。辻口一家の場合当初の疑いが新しい疑いを生んで、その生活圏での人間関係を全く破壊しつくすところまで侵襲しようとしていた。作者は現代人の生活の根本にこの疑いの病巣が根深く喰い込んでいるという考えを根底にもつていと思われるのである。

〔憎しみ〕 このようにして、この疑いが最も直接的に具体化し発展したのが憎しみの感情である。すなわち啓造の夏枝に対する疑いは、ルリ子の誘拐・殺害そして殺害犯人が佐石土雄だと判明したのを契機にして忽ち強い憎悪・怒りとなって村井医師や犯人佐石に対して、従つてまた犯人の遺児に対しても激しい憎しみを掻き立てられるのである。そして妻夏枝への憎しみは、「何ものにも代えがた」(72)く愛していたが故に「妻の背信は、村井や犯人に対する憎しみより強かつ複雑」(72)であつた。「村井が訪ねてきて、妻の夏枝と過ごした時間を啓造は想像」して「ズタズタに引きさかれた胸から、本当に血がしたたり落ちる」かと思われるほど「耐えがたく苦し」く「生きる希望の光」を失ない「深い絶望」の中に「夏枝を殺して、共に死のうか」(68)とまで思いつめるのであつた。

〔悪だくみ〕 こうした憎しみが次第に具体的な形をとつて夏枝への復讐として啓造の心中に育つて来るのである。それは夏枝のいじらしいまでに後悔の心の萌した、ルリ子へのつぐないの思いに乗じた悪だくみであつた。夏枝は「どんな形でもいいから」「もう一度ルリ子にあいた」(48)く、同時に「ルリ子を死なしめたことへのつぐないの思い」(48)で、ルリ子に代わる「女の子を育てたいというねがい」(48)をもつようになつて来たのである。また高木の関係している乳児院にいるような「不幸な子を育てることが、ルリ子ちゃんへの一ばんの供養のような気」(48)がするとも言っている。この、いわば善意ともいうべき願いを踏みこむような啓造の悪だくみが「ぬけぬけと嘘をつ」(77)くことによつて如何にも美しく進められるのである。「夏枝の喜びそうなことは、もはや何ひとつしたくはなかつた」(69)が故に、夏枝の望む貰ひ子をしようとしなかつた啓造が突然貰ひ子をすることを決意する。しかも夏枝には内密にして犯人の遺児を貰ひ受けることにするのである。「何も知らずに育てた子が、いつの日か犯人の子と知つた時……かわいがつて育てただけに、うちのめされることだろう。……仇の子と知つて育てる自分の方が、何も知らない夏枝より苦しいかも知れない。しかし、肉を切らせて骨を断つのだ。真相を知つた時、夏枝がじだんだんで口惜しがつても、すべては後の祭りになる日が来るのだ」と「啓造は、その時の夏枝のおどろきかなしみ、口惜しがる様子を想像し」(69)ている。この悪だくみ、こ

れにまさる罪悪があるとも思われぬ。このことは繰りかえし描写されている。しづつた出生届をな役場の門前で迷いつづけながら、自分の「本心は、陽子を愛することではない。夏枝に犯人の子を育てさせたかったのだ。」「知らずに陽子を育てる夏枝をみるだけで、おれは慰められるのだ」というようなことをあれこれ思つて「啓造は、役場の前を行きつ、もどりつ、自分の思いにふけていた」(108)のである。夏枝へのこのたくらみのことは高木への書きかけの手紙の中でも告白している。

ところが夏枝は、ふとしたことからこの手紙を覗きみることによつて、啓造の惨憺な悪だくみを知つてしまつたのである。そして「事もあろうに、えりにえつて、ルリ子を殺した佐石の子を育てさせた啓造を、夏枝は許せなかつた。」(135・136)「陽子を少なくとも啓造の前では、今まで以上に愛しているようにみせようとも考え」「そして、いつか身も心も辻口をうらぎつてみせるのだわ」(138)と悪だくみへの決意をするのである。こうして啓造と夏枝は表面は極く当り前の夫婦として在りながら、事實は全く冷い不信の中に仇同志となつて、さらに何らかのつながりをもつた周囲の人々とまでも信頼のつながりが切れて孤独と絶望にさえ陥ろうとするのである。

〔孤独〕 こうしてすべてを知つた夏枝は、今まで信じきつていた啓造の愛も忽ち信じられない存在となつてしまつたところか「じつと息をひそめている間に自分が恐ろしい鬼女に生れかわつて行くのではないかと思われ」(137)るほど啓造が憎い夫になつてしまつた。その上高木さえも「陽子が佐石の子と知っているのだ」(137)と思うと「夫も、高木さんも、そして陽子ちゃんも……みんな私のところから去つてしまふのだ」と「不意に夏枝は、ひどく孤独になつた」(137)のである。こうして不信が不信を生み、たぐらみの上にたぐらみが重なり絡み合つて、全く罪深い墮地獄の不幸へ陥ち込んでゆくのである。誰もが他を信ずることが出来なくなり、頼れるのは自分だけという孤独を招来してしまふのである。

啓造は啓造で「いくら忘れよう、許そうとねがつても」夏枝が「裏切るうとしているように思われてなら」ず、この疑惑が「しよせん、人間は誰も自分一人の生活しか生きることができない」(11)という考えを生み、ふつと今年の春死んだ後輩の前川正の「茫茫天地間に漂ふ実存と己れを思ふ手術せし夜は」の歌を思い出し「彼のこの歌境にあつた時の孤独」(11)を同感するのであつた。

陽子は、その出生の秘密を知つてからの夏枝の度々の意地悪い仕打ちを受けて心の奥深く甚い衝撃と、離れた母を感じている。夏枝が陽子出生の秘密を知つた

直後、帰つて来た陽子の首をしめてしまつた。この時は陽子にとっては、信じ「頼りきつていた母夏枝が、一度も見せたことのない恐ろしい姿を見せた時」であつて、「陽子の心にも、別の面がうまれたのである」(145)。僅か七才の「幼い陽子にはいいがたい複雑なもの」ではあつたが『生れてはじめて』「淋しい」ということを知つた」(145)のであつて、当もなく夕暮れの街を人の流れの中に流されながら生れてはじめて人の信じられない孤独に小さい胸を締めつけられていたのである。卒業式の答辭のすりかえにもうまく切りぬけて却つて拍手をあげたりはしたけれども、感激の「仰げば尊し」の歌になつても母の作業だと直感した「陽子は歌うことを忘れていた」。「ほんとうの母なら、こんなことは決してしない」(289)と思ひながら「世のすべてから捨てられたような、深いしんとした淋しさ」(290)にうちひしがれた思いでいた。北原との愛情の間にも夏枝の悪だくみは種々の形で入り込み意地悪が続けられるのであるが、夏枝は最後に北原と陽子の前で陽子の出生の秘密を悪意をもって言い表わしてしまふのである。ここで陽子の孤独は絶望の頂点に達してしまつたわけである。

〔偽善〕 このように疑惑と憎悪の中で同じ屋根の下に人間的体面を保つて生きてゆこうとした啓造や夏枝であり、さらには互に相手を保つて悪だくみをするためにはおのずから偽善が表われて来るにちがいないのである。しかしそのことよりも、ここで注意しなければならぬのは、すでに教会経験もあり聖書にも触れたことのある啓造ではあるが、実は全くキリストとの出会いをもたない啓造を筆頭にキリスト者とは無縁の人たちばかりだということである。そういう人たちの依り所は神・キリストにはないということである。そういう人の愛は、確かな真実の愛とはなり得ないものである。と同時にすべての言行の上で意識に上つて来るのは人である、他人である。他人に心を置いて、自らの道徳律によらうとすれば「律法によつては義とせられない」だけではなくて、そこにはさらに偽善が生じ罪が生じ加わつてくる。

その第一に挙げなくてはならないのが、啓造の信条のように持ち出されている「汝の敵を愛せよ」という聖書の精神である。啓造にとつては学生時代以来の信条のようにしていたのであるけれど「何がむずかしいといつて、キリストの敵を愛すべし」ということほど、むずかしいものは、この世にないと思ひますね。大ていのは努力すればできますよ。しかし自分の敵を愛することは、努力だけじゃできないんですね。努力だけでは……」(10)という夏枝の父である恩師津川博士のことばのとおりには受けとられていなかった。啓造は博士のこと

ばを聞いた際にも、ただ「強い印象」を受けただけで「この教授には不可能なところが一つもないように思われ」「こんな円満な人にも敵がいて、悩むことがあるのか」(11)と不思議に思っただけであった。これは啓造が真実の愛を知らないで努力だけで「敵」が愛せるものだと考えていたに過ぎなかったこと、そして敵を愛することが実は「人性の自然に反し、人間の能力を越え」(矢内原忠雄全集、第十五巻)ていることであって、敢えて自分の力でやろうとすれば「偽善」たるざるを得ないこと、すなわち、万事人の力に頼ることで解決するという誤まった考えに終始していたということであろう。

だから徹に「敵ってナニ？」(9)と聞かれて「敵というのは一番仲よくしなければならない相手のことだよ」イエスが「そう教えたんだよ」(10)と教えながらその舌の根の乾かぬ中に、そう言った「自分がおかしかった」(11)り、村井と夏枝のことを疑って「絶対に許せない」と思い「敵とは愛すべき相手ではない。戦うべき相手のことだと徹にいうべきであった」(11)などといとも簡単に思いは逆転するのである。また、夏枝に対して、時にやさしく憐んで「夏枝のかなしみがそのまま啓造の胸につたわってくるようであるが、それは「思いがけない愛情が胸いっぱいひろがるのをどうすることもできない」(27)人間感情の激発にすぎないものであった。従って、その時ルリ子の殺害犯人判明の電話があるや思いはルリ子殺害の時の状況に移って「ルリ子を見知らぬ男の手に追いやったのは、村井と夏枝ではないのか」という思いに苛なまれ、しかも犯人佐石が自殺したと聞くと「村井と夏枝をにくむより啓造の気持のやりどころがなかった」(29)と忽ちにして変ってしまう。まるで八ツ当りに等しい感情的な「敵への愛」でしかなかったということになるようだが、意識が他人の上に及ぶと相手を欺いても「敵を愛する」信条を綺麗に見せようとしている。啓造は人物だと言われ、品行方正だと言われるにつけて、自分の内にあるものを「あらわに口に出せないだけに陰にこもって手に負えない」(53)自分に、すなわち偽善たらざるを得なくなる自己に苦悩するのである。

また、啓造を真実「敵を愛せる」男であって、彼なら「佐石の子を育てると思っているのかも知れない」(53)高木、そして夏枝との結婚についても啓造ならとあきらめて啓造の結婚を成立させたとも思われる高木であるだけに、啓造としては高木に対して「裏切りたくない」気持があった。それは、しかし「友情でもあり、意地でもある」と同時に「センチメンタリズムでもあった」(54)とところにその弱点があった。だから「ほんとうに犯人の子をひきとってみようか」と胸をか

すめた思いも「心のどこかで高木の拍手を期待」(54)する偽善となってしまう、自らそれを「いやしい」とも思うことにもなっているのである。

さらに犯人の子を貰うことについて、憎い犯人の子だからこそ考えたと前置きして「憎むということもばかな話」(61)で、そんな「辛い生き方」をしないためには「愛するしかないんじゃないかと」(62)思ったと高木に言ってみたり、高木から「夏枝も承知しているのかと念をおされ」ただルリ子の代りに「かわいい女の子をほしいんだろう」(76)と言われたのに対して、啓造はその真意である「夏枝を苦しめること」が目的である点は勿論論ひた隠して「佐石の子を育てる」のは悪くないことで「ルリ子の死が大きな意味を持つてくる」し、夏枝にしてもその意図を知れば「結局はよろこんでくれるにちがいない」などと全く「ぬけぬけと嘘を」(77)つけている。案外「大きな嘘はつける」(77)自分かも知れないなど大変な偽善家になってしまっている。

このような啓造が高木への告白のつもりで書きかけた手紙に『私は「汝の敵を愛せよ」をかくれみのにした、みにくい男なのだ。君ばかりか自分自身をもダメしながら、実は夏枝をゆるすことができなかった」(134)と白状している。啓造も夏枝もこのようにして、罪の上に罪の現実を重ね、自ら求めて泥沼のような罪と苦悩の不幸な生活へ陥ちこんでゆかなければならなかったのである。

【罪意識からの逃避】 このように互に傷つけ合い苦しめ合って、しかもそれが互にその罪を深くしてゆく姿が「氷点」全体にわたって見られるのであるが、その間、登場人物のひとりひとり絶えず悪意に充滿しているのではなく、四六時中自らの悪意に悩み、愛そうと試みるのである。その最たるもの一つは、洞爺丸遭難の折に崇高なまでの自己犠牲を示した外人宣教師の姿からと、遭難した自身の体験から来たものである。かけがえのない救命具を女の人と与えた宣教師のことを思つて、啓造は、自分には「決してできなかったことをやった宣教師は生きていてほしかった」と思った。そうして「旭川に帰って啓造は本当に悔なく、生きたいと思つていた」し「夏枝を愛し、徹を愛し、陽子を愛し、そして村井とも仲よく生きて行きたいと思つた」(209)。しかし啓造の心中には「あの宣教師の生命を受けついで生きること」は「不可能に思われた」し「あの宣教師がみつめて生きたものと自分がみつめて生きてきたものとは、全くちがっているに」(209)ちがいないと自覚している。全くそれを裏書きするように、五日ほど後には夏枝と村井のことに関してうちのめされたような思いにされ「一片の雪が、指に触れて溶けるようなあわあわしさ」を象徴した雪虫のように「幸福とか、平和と

いうのも、この雪虫のようなものだ(210)と嘆いている。その後で、自殺した患者前川正の心境を「孤独を通して」(211)死んだとし、自らを孤独を通して生きたと考えているが、その「生きたということは、あの大波とたたかうことに何とよく似ていることだろう」(211)と歎いている。これは自らの力で闘う姿だけではない、自ら闘う限りそこには勝利はあり得ない。これは罪からの自由というところが願われていないし、何によって罪の贖いがなされるかについても勿論無知であることを示しているのであって、啓造には罪の意識からの脱脚だけしか考えられていないことである。また「啓造は、夏枝の喜ぶことなら、その望む子をもらつても、ふたたび平和な家庭をきずきあげたいと思つていた」(69)こともある。しかし夏枝のうなじのキスマークへの疑惑から忽ち「夏枝の喜びそうなることは、もはや何一つしたく」なくなつて、犯人の遺児を貰い子にして夏枝を苦しめる算段をしたり、かと思えば「心の底に暗い洞窟がぼつかりと口をあけていような恐ろしさを感じた」(69)「最愛であるべき妻にむかつて、一体自分はなんということをしようとしているのか」(69)と自らの思いに痛んでいる。そして「この恐ろしい思いは、自分の心の底に口をあけたまっくらな洞窟からわいてくるように思われ」(69)で、彼の自我の奥底にすべての不幸のもとになつてゐる原罪をさえ象徴しているかに見える。さらに、ルリ子が殺されてしばらく、夏枝はすっかり弱り込んで床についたきりであつた。啓造は、ルリ子の死の原因はすべて村井と夏枝にあると思つてひどく憎んでいた。そんな夏枝を病室に見舞つて、妻の悔いを思い「思いがけない愛情が胸いっぱいひろがるのをどうすることもできない」(27)こともあつた。遺児のひきとりを高木にたしなめられて「そうだ。夏枝はいたわらなければ……」とも思案する啓造。首をしめられて辰子のところへ行つた陽子が翌朝帰つて来ると「夏枝にしがみつき、二人が泣かんばかりに抱きあつてゐるのを」みて「夏枝は陽子を愛している」と感じ「夜も眠らずに過した夏枝のことを思うと佐石の子を育てさせてゐる自分の残忍さを責められる思い」(165)の啓造でもあつた。

作中至るところに繰り返えし見られるこうした善意や反省あるいは決意と、それが忽ち崩壊しきつてしまう姿は、自らの内なる罪から、すなわち罪の現実からの脱出を目指していなかつたことである。すなわち、啓造も、その他の人々も皆、例の外人宣教師のように神に向つて「神を見つめて」生きることを知らないで、この世に目を奪われて神を疎外し、自己中心に考えることだけで生きて来たということである。このように啓造をはじめ「氷点」の人たちは、神によ

る真の自由を得るべき方途を与えられていなかったのである。彼らの善意も反省の崩壊の繰り返しは、すべてが単に自己の内なる人間的反省・人間的善意の域を出ないものであつたからである。いわばそれがただ罪の意識から脱れたいという思いに過ぎなかつたことである。罪の現実をまだ真に自覚していなかつたと言ふことなのではあるまいか。

〔原罪の自覚〕 このように如何にしても夏枝の不倫の疑いから脱れられず夏枝を宥すことができない啓造。遂に啓造のたくらみを知つて許せなくなつた夏枝。そして犯人への憎しみから犯人の遺児として引きとつた陽子を愛せない啓造と夏枝。こうした愛憎交々の苦悩にとり囲まれて呻吟する辻口家の人たちはそのままでは永遠に罪の中にその苦しみを続けなければならなかつたのである。しかしこれが実は人間一般の姿なのではなからうか。パウロが言つてゐるように、人間にとつては結局問題は人間的な反省や善意ではどうなるものでもないのであつて、人間にとつて問題なのは「善をしようとする意志を」もちながら「罪に陥らざるを得ざらしめる「肉」である」(略解、413)。人間とは「現実の倫理生活において、常に」「罪にまげがちな」弱い姿をしたもの(略解、414)である。こうした、人間の罪の自覚の前提なしに人間の幸福はあり得ないであろう。この罪の自覚、しかも「この深刻な苦悩の中から私は、なんともいみじい人間なのだ。だが、この死のからだから、私を救つてくれるだろうか」と悲痛きわまる叫び」(略解、414)の挙がるほどの自覚があつてはじめて幸福が甦つてくるはずである。

さて、「氷点」では、総ての不幸がお互の人間不信から起こり、人間不信の絡み合いの連続が一切の不幸と苦しみを生んでゐた。しかし、陽子の自殺といま一つ、同時に陽子の出生の秘密のからくりがすっかり明瞭になつて、それが契機となつて「氷点」の人たちもそれぞれに自らのこのよな罪の深さを自覚するのである。「どうして陽子さんが犯人の子供だと信ずることができたんですか」という北原の問いに、啓造は「高木を信じていたから」と言う。このことについては高木も「おれも辻口という男は、犯人の子供だということを夏枝さんにはいわずに、本気で、汝の敵を愛せよ」を真面目にやる男だと信じていた。人間なんか信用できないと知つていながら、辻口だけは信じていたんだ」と言う。これは「信頼し合つたことさえ、悲劇になることもある」(412)と啓造が考へてゐるように「氷点」悲劇の大きな根本原因となつてゐる。それはこの信頼が真実の信頼でないからである。啓造の、また高木の勝手な自己流の考えの中に在るものに過ぎない。

すなわち確かに真実を保証する絶対の依り所のない信頼である。根本から崩れ去るのは当然であろう。だから「お互いに信頼し合いながらも結局は高木も自分も相手を欺いていたのだと思うと、啓造は背筋の寒くなるような思いがした。どこかまぢがつている。信頼とはこんなものではない」(412)と気付くわけである。キリストとの出会いをもつ兄弟姉妹は神を通しての人間関係をもち、人間だけの間で直結する人間関係には真実の信頼が成立しようがないことを自覚しているのである。「人目はごまかせるからな」(412)と思う啓造の心中には、かくて「原罪の自覚」が明瞭に生まれて来ているのである。

どのような信頼でなければならぬのか、どうすれば不幸を呼ぶような偽の信頼に陥らないで済むのか。そのことについても啓造にはわかつて来たのではなからうか。前の思いに引き続いて「人間同志は心の底まで見とおすことはできないからな。これがもし、神の前だつたら……」¹⁴と思ひ「しよせん、高木も自分も神の前に立つ」ということを知らなかったのだ(412)と思うのであった。そこに啓造は神の力を通してのみ真実があることをも自覚したのではなからうか。だから高木が「陽子ちゃんは、だれの子に生まれても、いつかは、こういうことになつたんぢやないのかな」と言い、啓造は「いつかは同じ罪意識を持つような人間だよ、陽子ちゃんは」(414)などと話し合う。このことから啓造は「おれは犯した罪のことを問題にしているが、陽子は罪の根本について悩んだ……」と考へ「自分がそこまで悩んだことがないことに気づいた」(414)のである。このことは、この時この瞬間の啓造の原罪の自覚を最も明確に表現したところである。同時に「ゆるし」を請うて叫び泣いた夏枝にも罪の自覚が訪れたことを表現している。啓造の思いに等しく、「佐石も、夏枝も村井も、高木も、そして中川光夫も三井恵子もみんな陽子をここまで追いやったことになる」(413)。すべての人々がそれぞれに「氷点」の不幸を生む原因の何かを幾らかずつ内に持っていたわけである。それを今明瞭に自覚しているのである。だから「人間存在そのものが、お互いに思いがけないほど深く、かかわり合い、傷つけ合っている」原罪の存在というものに「今さらのように啓造はおそれをかじった」(413)のである。

〔救い〕 かくて、原罪の自覚を得れば「氷点」の主題はその大半を完了し、作者の意図もそれで尽きる筈であるが、作者の否定的なことばにもかかわらず、なお罪からの自由を与えられるという希望への効果をも予定されてあったのではないかと思われる描写に屢々つき当るのである。ルリ子殺害犯人の佐石が自殺してから一週間後のところであるから作品としては極く始めの方であるが、新聞

記事や和田刑事の話など思い出しながら「通り魔のようなものだった」とつぶやき「もし、ルリ子が一分あとに家を出ていたらば……」と、それを「ルリ子の不運」だとし、また「佐石にとつても、やはり不運といえるかもしれない」としている。「そう思うと、啓造は「偶然」というものの持つおそろしさに、身ぶるいした」(32・33)と言つてある。この事件の発端のことを「不運」だとか、「偶然」だとか、少なくとも人間の力や人間の予定ではどうにも動かすことのできないものとして設定している点は、この作品では作者の救済暗示の予定が始めから設定されていたと言つてもよいのではなからうか。

また、洞爺丸で遭難した後、誰をも愛して悔なく生きたいと思つて旭川に帰つて来た啓造が再び夏枝と村井の間に疑惑を持たざるを得なくなつて、丁度遭難の折「黒い海」の中で「見あげるような大波が」おそいかかった時「死に面して」「全く無力」であると感じた(206)のと同じように、「生きるということは、あの大波とたたかうことに何とよく似ているだろう」と観じ「啓造は明るく平和に暮らしたいとねがつているのに、波はまた啓造に襲いかかつてい」(211)るといふ事態をもたらしつていた。そうした折啓造はふと街の書店で聖書を手にするのである。そして学生時代の教会生活を思い出すのであるが、それはただ人間的効用の為すぎないものであつて、言わば神ともになき教会青年に過ぎなかつた。だが偶然見出したキリスト誕生の次第の¹⁵ところには、胸を打たれた。すなわち「結婚していない婚約者」マリヤの妊娠によつてヨセフの懊悩が「ひそかに離縁しようとするほどになつていたことについて、啓造は「夏枝の背信」に対する悩みと十分ひき較べることができた。しかし、それが「神の意志」であると告げられて、ヨセフはマリヤを妻に迎えたということに啓造は強く心を打たれたのである。それは「最も信じがたい立場にあつて、天使の言葉に素直に従つたヨセフ」であつた。「ヨセフが神を信じ、マリヤを信じたように啓造も、夏枝の人格を信じたかつた」(213)。しかし、問題は「ヨセフが神を信じ」たということに在るのであつて、その「ように」「夏枝の人格を信じたかつた」啓造には、ヨセフのように絶対不動の依り所がないわけである。自らとその相手となる夏枝という人間以外の依り所がないのである。啓造には、対象夏枝以外にないのであつてヨセフには神への信頼だけがあるわけである。だから「ヨセフがマリヤを信じたほどの、堅い信頼で結びつく人間関係というものがあるだろうか」(213・214)というヨセフのマリヤ信頼には、その前提があるわけで、そのことを無視した、あるいはそれに気付かない人間関係である啓造と夏枝の場合、不安定な不信感だけが残るのは道

理であろう。要は、すべてをゆだねるべき権威ないし絶対者を思わせることであって、ここにも作者の人間救済への暗示意図はすでに明瞭に表現されていると見るべきではあるまいか。しかし、啓造がこの信頼の本当の意味に気付くのは、陽子の自殺という大事件によってであると言つてよからう。「原罪の自覚」のところで既に述べたように、陽子のまだ覚めていない床の前で、陽子のこうなる原因を考えたり話し合ったりしている中に結局人間の相互不信頼にゆき当る。そして信頼し合つたと思つていたものさえ不幸や悲劇の原因でしかなかったことを「神の前に立つということ」を知らなかった⁽¹¹²⁾からだと気付くのだが、ここには、人間の不幸や悲劇を救うもの、すなわち人間を罪から解放放つて自由にするものが何であるかを作者はやはり明示していると言わなければならぬ。

さらに、啓造の思いを通しての救済暗示に併わせて、終末近く突然、鬱屈していたものが一遍にはじけ飛ぶように夏枝の「ゆるして、陽子ちゃん」という叫びが挙がるのである。夏枝自身に神の啓示が現われたとは思われなくても、読者に与える爽快感は前後の啓造の思考到達に包まれて、陽子の場合と等しく「救い」の所在を示そうとする作者の隠された意図は十分果たされているといふことができる。

さて、復活のイエスに、触れないでは信じられないと疑い悩んでいたトマスが「見ないで信する者は、さいわいである」(ヨハネ二〇、29)と教えられたとある。「氷点」の人たちも人間の背後にある見えない絶対なるものの力を教えられているようである。「疑い」に終始した、自らの深いところにある、自らではどうしようもない「原罪」に気付いたのである。とともに彼らはトマスのように「見る」こと、すなわち「疑う」心に立つことを止めることを知つたにちがいない。そのように作者は読者を導くべき意図をもつたものと思われる。「氷点」の人たちは、この作品の最後の文字が終つたところから新しい出発を始め、真実に信頼を中心とする「さいわい」の生活に入ったであろうと推量させられるのである。このようなところに、この「氷点」の特別な力が厳然として認められなければならない。「疑いを信頼に変える」このような大きい絶対的な力は、キリストに出会うこと以外にない。そこには単に人間の心では量り知れない無上のさいわいへの転換の力がある。それをもこの「氷点」は訴え得ているといつてもよいのではないかと思われるのである。

注13、私の内に、すなわち、私の肉の内には、善なるものが宿っていないことを、私は知っている。なぜなら、善をしようとす意志は、自分にある

が、それをする力がないからである。すなわち、私の欲している善はしないで、欲していない悪は、これを行っている。もし、欲しないことをしているとすれば、それを行っているのは、もはや私ではなく、私の内に宿っている罪である。そこで、善をしようと欲している私に、悪がはいり込んでいるという法則があるのを見る。すなわち、私は、内なる人としては神の律法を喜んでいて、私の肢体には別の律法があつて、私の心の法則に対して戦いをいどみ、そして、肢体に存在する罪の法則の中に、私をとりこにしているのを見る。私は、なんとすみじめな人間なのだろう。だが、この死のからだから、私を救つてくれるだろうか。私たちの主イエス・キリストによって、神は感謝すべきかな。……

(ローマ人への手紙、七、18-25)

14、三、「原罪」と「救済」 I 陽子の場合、「救済の暗示」の項参照。

15、マタイによる福音書、第一章、18-24、参照。

四、むすび

これを要するに、小説「氷点」が純粹にキリスト者の立場から「真に人間の罪を深みにおいて追求」(キリスト教と文学)しようとして、問題を「罪の現実」とともに、罪の自覚にまで深めて⁽¹¹³⁾描いているということが出来る。作者の意図したとおりに不幸に充ち充ちた人間の世界が、平和で幸福なものになりうる希望を多くの人々に植えつけることの使命の一端を擔い得たのではないかとと思われる。そういう意味では、作者自らも、また多くの人たちからも指摘されているとおり、この「氷点」は「原罪」をテーマとしていることは勿論であるが、先に述べたように、作者は稍否定的な気持を述べてはいるものの、原罪をもつ苦悩する人間の「救済」についても意図的な暗示表現が認められることは、この作品の意義を深くしていると思われる。

また、当初引用した江藤淳の現文壇に対する「挑戦を感じた」ということばが思い出されるのであるが、彼がこの「氷点」をキリスト教文学と認めているかどうかは別として、「長い年月をかけて自分の生活の中から、こういう人間観を得」「生活感覚の新鮮さ」を表現していること、「自己中心的でない視点」あるいは「ひがみを否定する視点を提供している」(江藤淳)点において「挑戦を感じた」と言っているようである。このことは、やはり「氷点」に認められるキリスト教文学としての要素の故に、この作品が近代文学一般の中に在って特異な傑出面を

もっていることと一致していると言つてよいと思われる。

そこで、日本における近代文学が罪を描くに当つてどういふ視点において、どういふ採り上げ方をしていくかが比較されなければならないのであるが、この点については佐古純一郎の著述に詳しく、その概要は既述のとおりである。キリスト者としての主体を堅持した作者の立場での作品としては「自己中心的」でないとか「ひがみを否定する」とかの視点をもちつこと以外に解決できない問題であるはずであるが、キリストとの出会いをもつこと以外に解決できない問題をこの小説「氷点」では美事に解決しているといふことができるのである。言わば、「罪の現実を問」い、「罪からの解放」を問うている作品であつて、椎名麟三や遠藤周作の作品の域に肩を並べてあるといふ意義が認められる所以のものを示すところである。それが、小説としての技術的面において『あらゆる稚拙さやほとんどの非文学的な副人物の配置にもかかわらず、「氷点」をある説得力をそなえた』（江藤淳）作品としている理由であり、「原罪」をテーマにしたものであるが故に、「救済」の意義説得にまで高められた独得の力ある文学性が、際として輝いているといふことにもなるのであろうかと思われるのである。

注16、第二章、注6、参照。

〔参考資料〕

たもののみ掲げる。

- 1、「氷点」。(頁数のみを示す)
- 2、聖書。(書名、章、節)
- 3、口語新約聖書略解。(略解、頁)
- 4、註解新約聖書、黒崎幸吉。
- 5、矢内原忠雄全集、第八巻、第九巻。(矢内原、八、または、矢内原、九)
- 6、朝日新聞、文芸時評、江藤淳、昭和40年11月26日付夕刊。(江藤淳)
- 7、朝日新聞、朝日現代女性の会講演、『「氷点」をめぐる女性の生き方』、三浦綾子、昭和41年3月26日付。
- 8、毎日新聞、「四月の小説」上、平野謙、昭和41年5月2日付。(平野謙)
- 9、信徒の友、昭和41年3月号、

○『対談「氷点」について』、三浦綾子・佐古純一郎。(対談)

○『「塩狩峠」の連載の前に』、三浦綾子。(「塩狩峠」の連載の前に)

○本の紹介「恩寵の世界へ導く物語」・三浦綾子著「氷点」。大阪・扇町教会牧師、中路嶋雄。

10. 信徒の友、昭和41年7月号、キリスト教文芸講演会講演「陽子と辰子」、三浦綾子。
- 11、こころの友、一四六一号、『「氷点」を書き終えて』、三浦綾子。(「氷点」を書き終えて)
- 12 こころの友、一四六三号、キリスト教問答「救いについて」、鈴木正久。
- 13、こころの友、一四六五号、「ほんとうの救いを求めて」、テレビと競ふ「氷点」。
- 14、こころの友、一四六六号、聖書のことば、「見ないで信する者は、さいわいである」、宮崎明治。
- 15 キリスト教と文学、佐古純一郎。(キリスト教と文学)
- 16、近代日本文学とキリスト教、佐古純一郎。
- 17、近代日本文学の悲劇、佐古純一郎。

(国語教室)

(昭和四十一年六月三十日受理)